

# 地酒の里探訪

Vol.3

田植えを終えた庄内平野と鳥海山

『地酒の里探訪』第3回目。取材班は前回の石川県から富山、新潟を飛び越して、この夏、山形県庄内平野へ飛んだ。

羽田を出た飛行機が内陸部を一直線に飛び、頂に雪を残す朝日連峰を望むあたりから大きく旋回をはじめ。庄内空港は海岸近くにあるため、機は一度日本海上に出、そこからランディングしようというのだ。

機体の旋回に合わせて、窓に映る景色が目まぐるしく変わる。順序は見た順とは異なるが、山岳信仰で有名な月山、湯殿、羽黒の出羽三山が飛び込んで来たかと思うと、出羽富士の異名がある鳥海山がグンとせまる。かと思えば、青田に埋め尽くされた庄内平野が緑の絨毯を見せる。絨毯の新潟県寄りには鶴岡市の街並み。鳥海山の裾野に細く白く光る最上川の河口には酒田市が見える。ベルト装着のサインが出る。ころになると、真夏の日を受けてまばゆく光る日本海が窓いっぱい広がる。

## 鳥の目に鳥海山や夏の雲

これから訪ねる庄内平野のそれぞれの姿を記者は「日光写真」を作る思いで目に焼き付ける。

機上から見る出羽三山や鳥海山は高さを感じさせないが、庄内平野の広さには目を見張られるものがある。

資料によれば、庄内平野の耕地面積は44300ヘクタール（ちなみに1ヘクタールは302

5坪。総坪数は自分で計算を。このうち、田耕地面積は38600ヘクタール（平成9年度農水省山形統計情報事務所統計情報。さすがに全国有数の米どころではある。それにしても東京ドームが幾つ入るのだろう。

ここに記した数字には、もちろん市街地などの面積は入っていない。それを加えれば、数字はもっと大きくなるのだがこの広さの中に酒蔵は19軒存在する。この19軒の中に記者と同姓の酒蔵もあって「ニマリ」させられたが、今回は残念ながら訪問対象外。今回お訪ねするのは「古里の美酒」をキヤッチフレーズにする『竹の露』を送り出している羽黒町の竹の露合資会社さんと、『出羽路に酒あり』をうたい文句の『出羽ノ雪』でその名の高い鶴岡市の株式会社渡會本店さんの2醸造元。

庄内の青田の海や機首下がる



# 爽やかな竹林の中の地酒蔵元

## 竹の露合資会社

竹林も暑に耐ゆるかに酒の蔵

社長さんが杜氏

この夏、東京も暑かったが、庄内平野も負けてはいなかった。そんな暑さの中を明るい笑顔で竹の露合資会社営業部長の相沢政男氏が取材班を迎えてくれた。相沢さんの運転でサヤサヤとそよぐ青田の中の広域農道を走る。信号などなく、田園の高速道路という趣き。正面に出羽三山、左手に鳥海山。都会者には申し分ないロケーションだ。

「庄内は、各市町村に温泉があるんですよ。見れば、青田越しに洒落た建物が建っている。誰でも入れる健康センターだ。温泉があつて、旨い酒があつて、これで朝寝があれば小原庄助だと思つたが、庄内米を作る人たちには朝寝だけはない。農家の人たちは早起きだ。」

田の真ん中に温泉の井戸があつた。相沢さんが蛇口をひねると豪快に温泉がほとばしり出る。泉温74度。恐る恐る指を濡らしてなめて見たら潮辛かった。

青田を走り、畑が出て来ると有名な庄内柿の柿園が続く。もともとは渋柿だが渋抜きの技術の進歩により、その味は天下にとどろくという。

こんもりと茂る竹林が見えると、そこが竹の露合資会社。

事務所で挨拶をしているところに社長さんが息急ぎ切つて駆けつけてきた。「いま、忙しいところなので、ご挨拶だけで失礼します」とのこと。名刺の交換を済ませるとすぐに事務所をあとにした。金野松弘氏が社長さんのお名前。それはいいとして、肩書にビックリした。「代表社員」とある。

こと「経済」に関することにはまったく無知な記者である。合資会社の場合、社長とは言わず、代表社員ということを知つた。思わず「原稿では『社長』と書いていいんですか」と聞いてしまった。

「いいですよ。われわれも社長と呼んでますから」と相沢さん。

「せつかくおいでいただいたのに、社長が相手出来なくて申し訳ありません。実は、今日『呑切り』をやつておりますので終わるまで手が離せないんです。社長が杜氏を兼ねてるものですかね」

社長さんが杜氏!? この疑問を解説してもらふことが、実は、竹の露合資会社の歴史の説明にもなる。



代表 金野 松弘さん



営業部長 相沢 政男さん



### 羽黒山神社神事の酒

東北の霊場として名高い出羽三山のうち、羽黒山は修験道羽黒派の本拠である。その羽黒山がある羽黒町(10年10月現在人口19774人)は、奈良時代から羽黒山神社の門前町として栄えてきた。俗にお神酒上がらぬ神はなし、といわれるが、修験僧たちの神事の折に使われる酒を造り、納めていたのが門前町にあつた造り酒屋だつた。つまり、竹の露合資会社の先人たちは、その造り酒屋(創業が安政5年(1859)の蔵人だつたわけだ)。

その造り酒屋で杜氏を務めていた初代が造り酒屋を引き継いだのが、慶応年間(1865~1869)。その後大正13年に法人化し、現社長が4代目にあたる。

つまり、初代が杜氏であつた伝統を今日まで守つているひとつの証左が、社長さんが杜氏という事実だつたのである。そして経営者=杜氏という伝統は、厳格な酒質管理と販路の厳選という、竹の露合資会社の揺るぎないモットーとなつて、自慢の「竹の露」を産み続けている。「竹の露」(命名の由来は明らかでないが、蔵を取り囲む竹林に、その根がありそう。今でこそ竹林もささやかなものになつたが、昔は一面の竹林で、竹細工なども盛んだつた。酒蔵というイメージとして大きな酒樽を連想するが、この大樽も竹でタガを作れるようになってからの産物だといふ)。

それにしてもなんという爽やかなネーミングだろう。余談だが登山を趣味とする記者は、若いころは単独でさまざまな山を歩いてきた。そのとき、水筒の水をできるだけ減らさないようにするため、山径の脇の

くまざきなどに朝露が残っているかぎり、それのどを潤したことを思い出す。あの竹の露はまさに「甘露」であった。

本題に戻れば、竹の露合資会社の経営者＝杜氏という図式は、現社長で最後になる。最近、39歳という若い杜氏にバトンタッチしたのだ。「杜氏 本木勝美」という名刺をいただいたが「まだまだですよ」と明るく笑い、呑切りを続ける金野社長のかたわらでキビキビと動いていた。その若さが美しい。

## 地酒としての誇り

地酒の意味を広辞苑で見ると「その土地でつくる酒」とある。わかつたようでわからない説明だが、そのあたりを相沢さんに聞いた。

「これは当社の『竹の露』の特徴でもあるのですが、すべて地元の水で育った地元の酒

庄内



米で作っているということでしょう。よく、地元の米を地元の水で炊くとおいしいと言われますが、これは酒にも言えることなんです。その地元の酒を、地元の料理を肴にして飲むのがいちばんうまい。すべてが地元に着しているのが地酒であり、地酒の誇りなんです」

なるほどと思う。庄内平野で生産されている酒米種は、美山錦、出羽燦々、京ノ華、幻の米と言われる亀ノ尾など五指を越えるが、それらの酒米を、竹の露合資会社の蔵人が栽培している。もちろんそれだけでは足りないので、契約栽培も実施しているが、とにかくすべての酒米が羽黒を中心とする庄内産。仕込み水は月山水系の「伏流水」。

現在、庄内平野の酒米生産者は51軒（内48軒が羽黒町内）。その作付面積は食用米も含めたそのわずか0.5%。しかし、そこから収穫される酒米を少しでも品質の優れたものにしようと、毎年品質の競い合い（いわゆる品評会）も行われているという。「私の家でも少し作っているのですが、とにかく生産者さんが汗を流してくれた酒米の特性を活かした酒造りをしています。うちの蔵でも普通酒から大吟醸まで造っていますが、どの酒にも『竹の露』の特徴が一本通っているのがわかつたいただけははずです。それが自慢ですね」と相沢さんは語る。

以下、雑談。

――『竹の露』は甘口？ 辛口？

「甘口です！」

――酒米を炊いていただくとお味は？

「パサパサしてだめです。食事のときに旨い

と感じる旨み成分は、酒米にとつては雑味成分となるんです」

――神社の皆さんはお強いんでしょう。「そりゃあ、もう笑い。神事の時のお神酒はしれた量ですから、神事3に対して直会7というところでしょうか」

■所在地＝山形県東田川郡羽黒町大字猪俣新田字田屋前133

\* \* \* \* \*

庄内平野、真つ昼間。日差しがやけにまぶしい。青田の海は風状態。その中でひとときわ赤く、大きな鳥居が目立つ。出羽三山への参道入り口とのこと。

## 出羽参道丹き鳥居や田水沸く

庄内を訪れたら、羽黒山神社詣では欠かせない。開山1400年以上の歴史があり、三神合祭殿に参れば、月山、湯殿山にも参詣したことになる。また、表参道に建つ国宝五重塔は庄巻。平将門建立とも伝えられ、樹齢数百年の杉の林の中に堂々と建つ。芭蕉を専攻していた記者は、その足跡をたどる旅で、最上川を船で下り、この塔の前に立つたが、約30分、無言で塔と向かい合った記憶は、いまだ薄れない。

「竹の露」の純米酒を冷したものを持って塔の前に座り、塔と酌み交わせば「一杯一杯 復た一杯」の李白の気持ち解するところになるのでは。

交通は鶴岡市駅前から庄内交通バス羽黒山頂行きで50分。

羽黒山を背に庄内平野を突つ切り、鶴岡

## 地酒の里探訪

酒造の永い歴史を刻んでいる  
株式会社渡會本店



# 酒造資料館をもつ歴史ある蔵元 株式会社渡會本店

市(10年10月現在人口1100584人)  
『竹の露』の相沢さんが運転する車で送ってもらおう。道を曲がる度に方向感覚が鈍ってくるが、山歩きの経験で、太陽の位置で西へ向かっていることだけは辛うじて判断が付く。それほどに庄内平野は広い。

鶴岡市内に入ると、もう農道の高速道路を飛ばすようなわけにはいかなくなる。バイクパスを走りますね」と相沢さんが言う。旅ずれしている記者も、鶴岡市は初めての訪問だけに、街の中も見たいという気持ちがあったが、反対する理由はさらさらない。そもそも、鶴岡市はかつて庄内藩と呼ばれた酒井家十七万石(最高時)の城下町。酒井家の祖は徳川家康に仕え、本多家、井伊家、榊原家と並んで「徳川四天王」と言われた名家である。

名君であった藩主は、庄内平野の立地条件をくみとり、明治の藩政奉還まで開墾を奨励、稲作を広めた。

そんな歴史のある土地で、酒造の永い歴史を刻んできたのが株式会社渡會本店である。

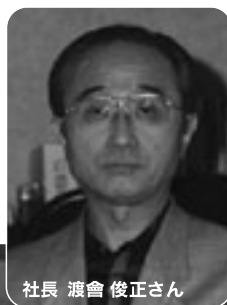
太い道路から路地へと車が入るとそこに

株式会社渡會本店があった。すくそばを大山川が流れる。そこで渡會俊正社長と渡會俊仁常務にお会いした。

### 酒造資料館が自慢

株式会社渡會本店の自慢と言えば、それはもちろん名酒『出羽ノ雪』を挙げるのが当然のこと。が、渡會本店さんにはもう一つの自慢がある。

それが「出羽ノ雪酒造資料館」だ。別名「尚古館」。「尚」には「たつとぶ」というとぶの意味があるから古いものを尊ぶが「尚古」のころ。資料館は昭和45年秋のオープン。この原稿を書くにあたり、記者が買い求めた旅行ガイドブック(昭文社・旅王国シリーズ⑧)にも「みどころ」の欄に紹介され



社長 渡會 俊正さん



近代的に設備された工場内

ているほどだから、それは一酒造会社の資料館の域を越えて、この地の観光資源になっていることがわかる。

「うちは歴史が古いので、古文書が山のようにあるんです。それに昔の酒造りの道具などもたくさん残っているが、それをしまっておくだけでは何の役にも立ちません。そういうものに興味のある方に見てもらってこそ価値があるわけですし、酒造りに携わった先人が残した大切な遺産を後世に伝えていくことにもなると考えて、資料館を作ったんです。しかし、こういう物は今日思いついて明日には出来るというものではないかもしれませんから、昭和30年代から計画を練って、45年の開館となりました。その当時、こういうものは日本で3軒しかなかったのですが、今では山形県だけで6軒もあるんです」と社長。

前述の通り、観光コースに入っているため、年間の入館者6万人以上。入館料は100円だがきき酒コーナーがあり、渡會本店の大吟醸等の特別の酒を10種類以上も自由に「酒が出来る。

「金を取るのかよ、というお客様もおりますが、そのくらいはいいでしょう」  
記者もいと思う。

### 利き猪口の白さ涼しや太き梁

### 館内展示品の豊富さ

資料館を案内してもらった。入り口は注連縄を飾った城門のような構え。それを入ると大平正芳元内閣総理大臣が書いた「坐花酔月」の額が出迎えてくれる。生前の大平さんを偲ばせる温かみのある字で、呑



「出羽ノ雪酒造資料館」別名「尚古館」

兵衛の記者にはたまらない四文字だ。

進んで「尚古館」の扁額をくぐると第一展示室。その名のとおり、昔の酒造りの道具類から、帳場、酒器などが並ぶ。中でも帳場にあつた七つ玉そろばんには驚かされた。「五」の玉が二つもあるのだ。見いらしたそろばんの先生も使い方がわからないと言っていましたとは渡會社長と共に記者に付き添ってくれた女性の言葉。次の特別展示室は酒造技術史料や「出羽ノ雪」の明治10年以降のラベル、二紀会の重鎮だつた松村外次郎の作品から渡會家に伝わる美術品などがズラリ。竹久夢二をはじめ、名だたる文学者の直筆などに、記者は呆然。可能ならこの部屋だけで一時間は欲しいと思ひじみと思つた。

稲の展示室は、庄内産のものとはとより、世界各地の稲が飾つてある。一口に稲と言ってもその種類の違いに、まさならながら驚く。第二展示室は近代醸造の揺籃期の道具などが並ぶ、いわば産業博物館。そして、お待ちかねのきき酒コーナーへと続く。もちろん、お気に入りでしたらどうぞと、売店もある。

### 渡會本店の歴史

株式会社渡會本店は祖先が橋氏でそもそも伊勢国度會郡の出。その後、出羽国田川郡大山邑に移り、元和年間(1615~1624)には、中祖橋屋新石工門がすでに酒造業を始めていたというから約380年の歴史があるわけで、藩主酒井家の移封よりも早いことになる。渡會社長は中祖から数えて17代目。法人化は昭和43年。古文書が多いのもうなづける。

当時の大山地区には、約50軒ほどの造り酒屋があつたという。水良し、米良しはもちろんのこと、水利も良しで現在も流れている大山川が酒運搬を楽にし、出来た酒は船で酒田の港へと運ばれ、そこから北前船で各地へというルートが確立していたことが大山を酒の郷にしたという。新潟の酒と言えば、今では全国的ですが、古文書を見ると、新潟の代表的な料亭、鍋茶屋さんや行形亭さんなどは「酒は羽州大山より来るものを善しと為す」なんて書いてあるんです。面白いものです」

それに、と渡會社長は続ける。

「昔は、酒造というのはリスキーな仕事だったんです。今のようない設備がないから腐らせちゃうとかね。だから、バカな奴が酒屋をやつたんです。工場用に土地は使つ、機械を設備してもそれが一年中稼働するわけでもない。ね、そう思うでしょう」

言われてみれば、そんな気もする。確かに広い工場は閑散としていた。

「工場としては一番暇なときであることは確かです。極端な言い方をすれば、塚詰め作業をしているくらいです。しかし私たちはそうはいかない。この時期に、在庫とかいろいろ調べて、次の年にはどの酒はどれだけ造るか、ということを決めなければならぬ、つまり需要を読まなければならぬんです。

恒産なければ恒心なし、というのでしょう。蔵を大きくするよりも、存在するための企業の体力を如何につけていくかが大変なんです。地酒というと、どこか格落ちの感じもしないではないんですが、そんなことを気にするよりも、自然に存在し、お客様が必

出羽ノ雪

# 純米酒

要と認めてくれる酒を造ることが大切なんです。その認めてくれる縁を大切に作る酒を造れば面白いですね」

## 常務の21世紀対策

客との縁を大切に作る酒造りという渡會社長の話には感動した。と同時に全銘柄のパンフレットで、渡會社長のこだわりを見せられた。

それはどの銘柄の酒にも、発売年月日、使用酒米名、精白度など、その酒のデータすべて書き込んでいるのだ。これこそ、客との縁を大事にする姿勢だと思つた。と同時に、資料館も10年近い構想の上で出来た。この話は、酒もコレクションとなるまでには、相当の試行錯誤があるのだということ。渡會社長は主張したいのだとわかった。

## 地酒の里探訪

熱弁をふるう渡會社長の隣に、渡會常務が座っている。21世紀の株式会社渡會本店を担つていく方だ。その抱負を伺つておかなければならない。「日本酒を飲む方が減っている

ことは確かなのに、蔵の数が多すぎるのが現状なんですね。でも多すぎるから、そちらは止めてくれとは言えない。とすれば、他社と同じことをやっつてはだめなんです。まず日本だけを相手にしては限度がある。今や、インターネットで世界中と瞬時に話が出る時代なんです。それを活用しない手はないと思うんです。そのためには、ラベルも変えていかなければなりません。漢字だけのものから、例えばルノアールの絵を使うとか、世界を意識していくというのがこれからの問題でしょうね」

地酒の里で聞いた、世界を相手にする話である。それが実現したとき、地酒はなんと呼ばれるだろう。そう言えば、鶴岡出身の高山樗牛の言葉に「吾人は須く現代を超越せざるべからず」とあつたのを思い出した。渡會常務の話そのものではないか。

以下、雑談。

——渡會本店とは短い社名ですね。「酒造会社とか、長いより簡単でしょう(笑い)。もつとも資料館は長くしすぎちゃたね」

——駐車場が狭いようですが、観光バスは何台入れるんですか？

「3台。これが頭の痛いところ。裏のスペースと仲よくしているので、いざとなるとそこを借りるんです」

——酒林を作るのは大変なんですか？  
「竹の箆に杉の葉を差し込んで、回りを切るだけ。簡単なものだよ」

## 酒林錆色となり西日かな

■所在地 山形県鶴岡市大山2-2-18

\* \* \* \* \*

やや、黄昏の鶴岡市。市内観光はホテルに部屋だけ取り、市内の有料亭で夕食をとるのがいいと言う。山海の珍味をリーズナブルな値段で楽しめる。京都などもまさにそう。昔、記者は京都で日本旅館に泊まり、夕食を頼んだら

あきられたことがある。  
市内の見どころは、鶴岡駅からバスで10分ほどのところにかたまっている。鶴岡城あとは鶴岡公園となっていて、散策に持つてこい。鹿鳴館風建物の致道博物館は藩政時代を知るには持つてこいの場所。付属する諸施設も一見の価値がある。

大宝館は高山樗牛を始め、鶴岡出身の文人たちの遺品が多いので文字好きの方にはお薦め。

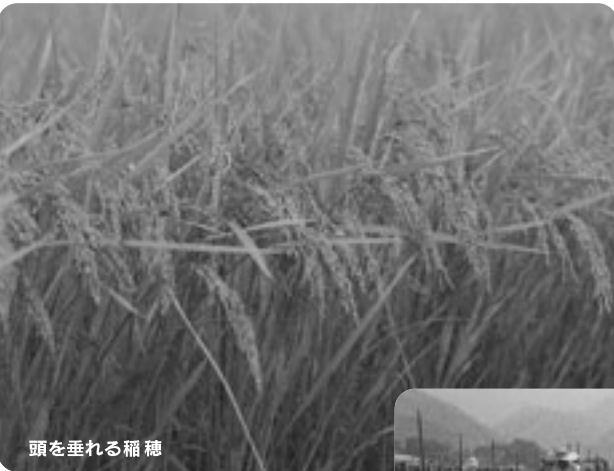
樗牛は、記者が卒業した高校の前身の旧制中学(福島県)の第1回卒業生。平家物語に材を取った小説「滝口入道」は有名。が、なんとやつてもお薦めは、鶴岡駅からバスで30〜40分のところにある海辺の温泉湯野浜温泉か、山の湯あつみ温泉。ひと風呂浴びて『出羽ノ雪』をやれば旅情ひとしお間違いなし！



酒米の収穫

この原稿が読者の目に触れるのは10月過ぎのはず。その頃、庄内平野の酒米は大事に収穫され、酒にする日を待つている。  
蔵開きは11月1日である。

(文中の「俳句もどき」は記者の遊び。あしからず)



頭を垂れる稲穂

